

プラトン『ゴルギアス』篇にみる善の諸相

SHIRANE, Yurie / 白根, 裕里枝

(出版者 / Publisher)

法政哲学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政哲学 / 法政哲学

(巻 / Volume)

10

(開始ページ / Start Page)

15

(終了ページ / End Page)

27

(発行年 / Year)

2014-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00009885>

プラトン『ゴルギアス』篇にみる善の諸相

白根 裕里枝

はじめに

この『ゴルギアス』という作品は、周知のように、三部構成となっており、弁論術の大家ゴルギアス、ついでその弟子のポロス、そして最後に新進政治家のカリクレスを相手に、ソクラテスが次々に問答を交わすという内容の対話篇である。ただそのテーマについては、古来より「弁論術について」という副題がついているが、弁論術ばかりではなく、不正についてとか、快樂主義批判であるとか、幸福論であるとか、哲学の擁護であるとか、政治批判に至るまで、多岐にわたって議論が展開されているために、何が本当のテーマであるかがしばしば論争的となっている。

今回この作品を、一つのテーマの下に統一して読むとい

う試みとして、「善の諸相」という言葉でくくってみた。というのは、何が善で何が悪かという点で、強調点の異なる三人の人物を登場させて、彼らの価値観を反駁すること、ソクラテスは「不正は悪（害）であり醜である」という自らの持説の真であることを証明しようとしているのだというふうに、この『ゴルギアス』を読んでみたいわけである。そこで、まずは三つの価値観と、三人の人物像について考えてみることにする。

I 価値の諸相とソクラテスのテーゼをめぐって

1 価値の三つの相

一般に価値観というと、真・善・美の三つが挙げられる

だろうが、これらを、何が善であるかという観点から、〈善〉の相の下に統一的に見てみるとどうなるかと考えてみた。すると、以下の三つの価値が、価値の大枠を形作るというふうに見えるのではなからうか。

まず、われわれの個人生活においては、何が善で何が悪かの選択の基準となるものは、主として快と苦であろう。快適な生活が善いことであり、苦や不快なことが悪であって、快苦は生物が生きるための情報や機能の一つであり、善悪の一種として否定はできない。もしも人間から快や喜びを奪ったならば、やがては死に至るであろう。¹⁾

しかし人前では、美醜(つまり、みっともないとか、かっこいいということ)が、行為を選択する際の善し悪しの基準となるであろう。われわれは、一歩外に出るならば、世間だの人目だのがあり、人前で恥ずべき行為は、みっともない、醜い、格好悪いと非難され、その反対に、人から立派だとか、見事だ、格好いい、素晴らしいという評価も得る。このような、評判や名誉や地位といった社会生活上の世間的価値評価の基準というものを一言でまとめてみるならば「美醜」という言葉で表されるであろう。この場合「美しい」とは、視覚的感覚的な快をもたらす効果のみならず、「立派な」「見事な」という、人から見られた評判や賞賛されるべき価値をも意味している。

とはいえ、われわれは国家(社会)の中で生きているのであって、ここでは、正と不正が善悪の基準となる。私たちが日々、安心して生活できるのも、建物の耐震性基準や電車の運行など、法律に従ってその基準が正しく満たされているからである。国家・国法というレヴェルで考えるならば、何が善悪かという判断基準は、正義と不正であると言えよう。だが、どんな状況の中で生きているのであれ、何が本当の善であるか、本当の善と真と美とは本来は一体となつて真実の価値を形成しているであろう。

以上のように、一般的に、価値(何が善か)をめぐって、三つの位相(レヴェル)というものが考えられるとすれば、『ゴルギアス』篇では、弁論術をテーマにしながらも、そこで問題とされているのは、このような大きな意味での人間の価値観をめぐる探求であり、それは、何が善かをめぐって、善悪・美醜・快苦・正不正という「価値の相互の連関」を明らかにするという課題に答えようとする試みだったと解することもできるだろう。そして、ソクラテスが価値をおくのは、何よりもまず正義であつて、彼は常に、「正義こそが善美であり、不正が悪であり醜である」ということを、倫理的行為を考察するための出発点(アルケー、cf. *Cril.* 48B-49D)としているのである。そこで以下、『ゴルギアス』篇に登場する三人の人物の価値観をもう少し具

体的に探ってみることにする。

2 三人の価値観と無知(思い違い)

『ゴルギアス』篇では、三人の人物が快苦、美醜、不正といった典型的な価値観を体现する人物として登場して、それぞれの命題についてソクラテスと問答をする仕組みとなっている。その典型的な価値観とは、登場する順序を逆にして簡単に言えば、次のようなものである。

まずカリクレスは、欲望の拡大と充足による快楽こそが何よりも善いものと主張する徹底した快樂主義者として描かれている。彼は、世の一般大衆は節制や正義の徳を褒め称えているけれども、それは自分に力がないからであって、節制や正義などは人間の約束事にすぎず、何の値打ちもないもので、むしろ、力のある者にとっては贅沢と放埒と自由こそが人間の徳(卓越性)であり、幸福なのだと言張する。そして、優者が劣者を支配し、強者が弱者よりも多く持つことこそが「自然本来」の正義だと主張する。さらには「自分自身の欲望を抑えるようなことはしないで、欲望はできるだけ大きくそのままに放置しておいて、大きくなった欲望に勇氣と思慮とでもって充分に奉仕できる者とならねばならない。そうして欲望の求めるものがあれば、いつでも、これの充足をはかるべきである」(492A)

というのが自然本来の美しく正しい生き方だとして、この欲望が大きければ大きいほどそれが充足された時の快樂は大きいのだと主張する徹底した快樂主義者なのである。

ポロスは、地位や名誉や評判といったものを手放して賞讃し、「美醜」という価値観を無条件に重んじている、無思慮で表面的な人物として描かれている。つまり彼は、不正をすることは醜いことだと認め、美醜という価値を重視してはいるのだが、何が美醜かというその内容の点で思い違いをしていて、地位や名誉といった、人から見られての表面的な評価としての美醜は重視するけれども、何か損害を被っても不正は決して行わないという精神の立派さとしての「美」は理解できないのである。自分には力がないために権力に憧れ、社会的に罰せられることのない独裁者を賛美している権力志向型の人間なのである。

他方ゴルギアスは、弁論術の知によって、人を支配することが最大の善であるという思い違いをしている知者の一員である。何よりも知を重宝なものとして重視しているながら、その知の内容において、正・不正、善・悪、美・醜の知は不要と考えていて、「正・不正と善悪、美醜との関わり」の知を欠いている、つまりは道徳的知識を欠如した知者として描かれているのではなからうか。

かくてこの対話篇では、これらの快苦、美醜、正・不正

という三つのレヴェルでの価値について思い違いをしている三人、言い替えると、善美のことに無知な三人を相手に反駁することで、ソクラテスは自らの説「正義こそが善であり美である」という根本命題（これは『国家』において本格的に取り組まれることになるが）と、それを言い換えた「不正が悪であり醜である」という説（ロゴス）が真であることを論証しているのだと考えられる。

ところで、この三人の人物像と、価値の相互連関の問いは、どこかで『国家』篇の魂の三分説に引き継がれてゆくものではなかるうか。プラトンの心の中には、この価値の相互連関の問題が（『弁明』『クリトン』の初めから）ずっとあり続け、その価値を体現する三人の人物像をこの『ゴルギアス』で描き、それらが『国家』での「魂の三分説」という更なる発想の根となつたようにも思われる。それぞれの人物の一面だけを取り上げてみるだけではあるけれども、例えば、カリクレスはまさに欲望的部分に支配された人物であり、ポロスは、体面を重んじる名譽の愛好者として気概的部分の勝つたタイプの人物であり、ゴルギアスは、知者でありながらも正不正についての認識が欠けているような、理知的部分を重要視するタイプの人間であるとも見られる。そして、まさに理知的部分の支配する正しい人の典型は、実は四人目の登場人物ソクラテスだと言

えよう。問答法による教授をこの対話篇で実践して見せているソクラテスは、教師でもあり、愛知者でもあり、唯一の真の政治家でもあり（Gosp. 311D）、まさに正しい人の典型なのであつて、ついには哲人王のモデルとなるのだと予見される。最後までその場で聞いているゴルギアスの前で、ソクラテスがポロスとカリクレスを相手に、あたかも問答法の実技演習を施しているかのようなこの『ゴルギアス』篇は、まさしく「魂の向け変えの技術」の実践なのである。

3 「ソクラテスのテーゼ」をめぐる

さて、本稿の論点は二つとなる。「論点1」、プラトンは『ゴルギアス』篇において、三人の登場人物が抱く、誤つた三つの価値観（善についての思い違い、善美のことへの無知）を明らかにしている。何が善で何が悪かという点で強調点の異なる三人の人物を登場させて、それぞれに三つの典型的な価値観を代表させて、彼らの善美についての思い違い（無知）を明らかにしていること。「論点2」、この『ゴルギアス』という対話篇の全体でソクラテスは、彼ら各々の善についての思い違い（無知）を明らかにし、これを批判し、反駁することで、自らのテーゼ、「不正は悪であり醜であること」を哲学の語る「真理」として主張して

いること、の二点である。

例えば、ポロスは、不正を行なうことよりも不正を受けることを悪(害)とするが、ソクラテスの反駁によって、不正を行なうことの方が悪であり醜であることを認めるに至る。またカリクレスは、一般に「不正」とされることを行なうこと、つまりは強者が多く取ることが快であり、美(立派)であり、善(優れた男のすること)であると云い、不正を受けることは醜い害悪(483A-B, cf. 492B)だと主張するが、ソクラテスはこれを反駁して、「不正は悪であり醜である」と結論する(508B-C, E, 509B, 527B, etc.)わけである。そして、一連の議論の中核にあるのは、「節制と正義こそが幸福である」という説(ロゴス)だとされている(508B-C)。このように、弁論術を信奉する彼ら三人の正・不正にまつわる無知を反駁して、哲学の勧める優れた人間の生き方を選ぶようにと、ソクラテスは呼びかけているのである。

ところで、『ゴルギアス』篇では、エレンコス(反駁)というソクラテス独自の吟味・反駁の方法によって、相手の説を反駁した結果、自分の説の「真理」が確立したと表明されるのであるが、なぜ、吟味・反駁の方法であるエレンコスによって相手の説を反駁するなら自説の「真理」が証明されるのかという点がしばしば論じられてきた。しか

し、おそらくソクラテスは、エレンコスの結果、この説を真理だと言うのではなくて、そもそも反駁の初めから、むしろ反駁を始める前から、この説の真理を確信していて、一貫して、この説の真理を主張し続けているのである。

そもそも『ソクラテスの弁明』では、「無知の自覚」の表明のすぐ後で、「不正は悪であり醜であることを私は知っている(δῖα, 29B)」とソクラテスは明確に述べている。また『クリトン』でも、脱獄すべきか否かという考察の中で、「大切にしなければならぬのはただ生きることでなく、よく生きることである」、そして、「善くと美しくと正しくは同じである」から、それゆえ正しく生きるべきで、「不正は悪であり醜である」から、「不正は決してしてはならない」し、「たとえ不正をされても、仕返しに不正や害を加えることもけつしてはならない」(48B)というように「不正行為の禁止」と、「報復の禁止」ということが言われていて、この「報復の禁止」という点は、ソクラテスの革新的道徳説の一つともされるわけである。こうして、この「不正は悪であり醜である」という知は、常に、彼の倫理的行為の考察の出発点におかれて、倫理的考察の原点(アルケー, 48E)をなすものであった。

このように、正・不正や善・悪、美・醜といった大きな枠での価値語の連関について、ソクラテス(プラトン)は、

『弁明』でも『クリトン』でも述べているのであって、彼の関心の中心は、常にこの点にある。正・不正、善悪、美醜、快苦について、伝統的な価値観を洗い直し、新たな価値語の連関を模索して、主著『国家』では「正義が善であること」の証明を試み、他方、『ゴルギアス』では「不正は悪で醜である」ことの論証を試みているのであって、その点で、『国家』とこの『ゴルギアス』とは、あたかもポジとネガのような関係にあると思われる。

プラトンは、人々の不正・善悪・美醜についての思い違いを正すことによつて、社会から何とか不正をなくすことを目指したのである。当時の政治の術であった「弁論術」の内に、民衆への迎合という、不正の根を見いだし、それが更なるアテナイ社会の腐敗に繋がっていることを明らかにして、大衆に心地よいことを言い、快樂を餌とするような弁論術のやり方ではなくて、市民一人一人が善き者となるようにと、善を目指す「哲学」の立場からこそ、政治を見るべきだと主張して、それが結局、『国家』篇での哲人王の思想へと結実するのだと思われる。

ちなみに、この場合の弁論術（レトリック）とは、いわゆるレトリック（文章修辭の技法）のことではなく、政治集会や法廷などで、大勢の大衆を相手に、善悪（利害得失）や正不正について大衆を説得する「大衆演説」の技術

のことであり、それは一種の政治の術として理解されていたものだったのである。

つまり弁論家は、言論の技術だけを教えるのではなく、法廷で黒を白と言い逃れ、正しい人だと見せかけるための技術、また民会では快樂を餌に民衆に迎合して、自由を政治を操り、大衆を支配する技術を教えていた。プラトンはそこに、アテナイ社会の腐敗の根を見いだしたのである。この悪しき「大衆演説」に対して、市民の善を目指す「哲学」こそが、真の政治の技術であるべきだとプラトンは考えていたと思われる。だからこそ、ソクラテス一人が真に政治のことをしているのだ (SND) と、逆説的な真理を述べさせてもいるのである。というのも、政治の唯一の目的は市民を優れた者とすることだと言われていて、それは市民を法と正義に従う者とすることを目指しているのだと思われるが、それはいわば、哲学と教育によつてのみ達成されることであるからだ。だからこそプラトンは、優れた市民と優れた政治家の教育に着手して、アカデメイアを創設し、また、『国家』篇を執筆するに至ったのである。以上の論点に関係のある範囲で、次に、この対話篇の内容を簡単に紹介しておくことにする。

Ⅱ 『ゴルギアス』篇の内容と

ソクラテスのテーゼ

第一部 ゴルギアスとの対話

さて弁論術とは、ゴルギアスによると、民会やその他の政治集会や法廷において、大勢の人々を前に、正しいことや不正なことについて、言論によって、短時間で信じ込ませるような説得を作るものであり、それによって「自身自身に自由をもたらすことができ、国においては他の人を支配できる」ようにするものであるから、それは「人間に関する事柄の中では、最高に善いもの」だとされる(452D)。そこでソクラテスから、それなら、弁論術さえ身に付ければ、「他のことは何も知らなくても、同じように知らない一般大衆の前でなら、知っている人(専門家)よりもっと知っていると思わせることができるのだね」と問われると、ゴルギアスは、それならば「弁論術とは、大変に重宝なものではないか、それさえ身に付ければ、ありとあらゆる大きな力を持つことができるのだから」と悪びれることなく答えて、自慢する(459B-C)。ここに端的に、他人を支配できる手段としての弁論術を最善のものと考えているゴルギアスの価値観を見て取ることができるだろう。

だがゴルギアスは、「もし弟子が不正をしたとしても、その責任は弟子にあり、教えた者には責任はない」と述べるので、ソクラテスに矛盾を指摘されることになる。というのも、はたして弁論家は「正・不正、善・悪、美・醜について」、知らないのか、知っているようにみせかけるだけなのか、また、弟子に教えるのか、教えないのか、とソクラテスが尋ねると、ゴルギアスは「弟子は私から学ぶ」と答えてしまう。しかし実際には、当の事柄を知らなくてもよいと言っていたであろう。そこでソクラテスは、もし弟子が「正しいことを学んだなら、正しいことをすることを欲し、不正をすることを望まないはずだから、弟子が不正をするはずはない」として、ゴルギアスの言葉の矛盾を指摘して、この第一部は終わっているのである。

ここでは、弟子が不正をするということは、結局、教師が弟子に正・不正について教えてはいなかったということが帰結しているわけである。「(この問題について)間違った考えをもつことほど人間にとって大きな害悪になることは何もない」(458A-B)と言われているように、ゴルギアスの正・不正についての思い違い、つまりは、善悪の知の欠如と無知とが、一番の害悪として明らかにされているのである(cf. 508B-C, 520B)。

さて、「正しいことを学んだなら、正しい人になる」という、いわゆるソクラテスの主知主義については、疑問があるかも知れない。しかしこの箇所では、知の対象が初めて、「正・不正、善・悪、美・醜について」と言われている(459D)。「価値の相互連関の知」が求められているのである。おそらくゴルギアスは、そういった「価値の相互連関」について思い違いをしていて、これを教えてはいないのである。つまり、「正義が善美で大事なものであり、不正は悪で醜だから、決して行なってはならない」という知を欠いていて、教えることは不要だと思っただけで、いから、弟子が不正をするのだ、という点にソクラテスの批判があると思われる。そしてまたゴルギアスは、弁論術があらゆる力を持つと自慢していたが、実際は、彼の知は、弟子に不正をさせないだけの力を持たず、無力だったのである。

第二部 ポロスとの対話

ポロスは、「ゴルギアスさんに失礼だ」と言っただけで、話に割って入るが、ポロスにとっては、弁論家が善悪、美醜、正不正について、知つていようがあるまいが、そんなことは問題ではなく、人前で体面を損ない、恥をかかせたことの方がむしろ問題なのであって(461B-C)、美醜を重視す

る彼の価値観がここに垣間見られるだろう。

さてソクラテスは弁論術のことを、技術ではなく快楽を旨とする卑しい迎合だと批判する。ポロスは、快をもたらしながら立派な(美しい)ものではないかと言うが、ソクラテスは、不正の弁護に用いられる法廷用の弁論術は、司法術の「影のようなもの」であって、「劣悪な」、「醜いもの」だと主張する(463D)。

するとポロスは、弁論家は独裁者と同じく、大きな力があり、誰でも好きな者を死刑にしたり追放にしたりできるではないかと、弁論家の実力、権力を無条件に誉め称え、賞賛の対象とするのだが、ソクラテスは、「もし思い通りのことを何でもしていても、知性を欠くなら、本当に望むこと(ためになる善いこと)をしていないのだから、力のあることにはならないで、弁論家は無力だ」と言っただけで、そのような力を否定し、弁論家を讚美するポロスの無知(思い違い)を明らかにする。

それでもポロスは、何でも思い通りにする自由のある独裁者が羨ましくはないのか? と問うので、ソクラテスは、「正義に従って(dikaios) そうしている場合か、それとも、不正な仕方で(adikos) そうしている場合か」と問い返すのだが、ポロスは、「どちらにしても両方とも羨ましい」と答えている(469A)。つまりポロスは、思い通り

にする力のある独裁者に憧れて、その力を賞賛するけれども、正・不正については無頓着で、どちらでもかまわないのである。むしろ地位や名誉や評判や権力、あるいは、体面とか、立派だの、恥だの、みつともないとかいったような、世間的な、人から見ての「美・醜」こそが、何よりも大事な、善し悪しの価値の基準なのである。⁽²⁾

さて、「羨ましくないのか」と問われてソクラテスは、「不正な仕方でも人を死刑にする者」（独裁者）が一番不幸で哀れであり、羨むには値しないと応答するが、ポロスは、「不正な仕方でも死刑にされる者」が一番不幸で哀れだと反論するので、ソクラテスは、「人に不正を行なうのは、害悪の中でもまさに最大の害悪だ」として、「自分が不正を受けるほうが、もっと大きな害悪だ」と主張するポロスと対立する。こうして、あのよく引用される対話が交わされるのである。「するとあなたは、人に不正を行なうよりも、むしろ、自分が不正を受けるほうを望まれるのですね？」とポロスが問うと、「ぼくとしては、そのどちらも望まないだろう。だがもし、人に不正を行なうか、それとも、自分が不正を受けるか、そのどちらかがやむをえないとすれば、不正を行なうよりも、むしろ不正を受けるほうを選びたい（469C）」とソクラテスは答えるのである。ソクラテスの考えは、この一言に集約されていると言ってよいだろう。

う。

ソクラテスは、立派な優れた人が幸福であり、不正で邪悪な者が不幸なのだと言張して（470E）、不正を行ないながら裁かれないことが一番不幸だと言い、誰一人それを認めないだろうと言うポロスに対しては、「真理は決して反駁されない」とまで言いつつ（472D-473B）、反駁している。というのも、ポロスは、「不正行なうこと」の方が醜いと認め、そして、何かが醜いとは、苦痛か害悪か、その両方かによつて規定されるということも認める。そうして、不正を受けるほうが苦痛であり、不正を行なう方は苦痛ではないから、不正を行なう方が醜いのは、それが悪だからだということになって、「不正を行なうことは悪である」ことが証明されるからである。そして最後にソクラテスは、そう言っていたのは真実だったのだと言っているのである（479E）。

ところでポロスは、なぜ不正がいけないかと問われると、罰せられるからだと言張っており（470A）、だから、罰せられることのない独裁者であれば不正は悪いことではないのだとして、正しい人よりも力のある者を賞賛していたのである。彼の心の底には、力への憧れと、不正を受ける方が苦だという、快と苦に対する通常一般の心理があるのだろうが、快と苦について対話を交わすのは、次のカリク

レスの役目となる。

第三部 カリクレスとの対話

話に割って入ったカリクレスは、もしソクラテスの言うことが真実ならば、人間の生活はまったくあべこべになるだろうとあざけるが、ソクラテスは、「不正が悪であり醜である」という主張は哲学が述べることであり、哲学はいつも同じことを言うのだから(482A-B)、もし反駁をするのならば哲学を反駁するようと言う。こうして哲学の勧める生き方と、弁論術の勧める生き方のどちらを取るべきかが争点となる。

さて、「力の強い者が多く取ることが正しい」という「強者の正義」を主張するカリクレスに対して、ソクラテスは、優者や強者とは何者なのかと問い、それをまずは思慮と勇氣のある者だと規定して(491B)、続けて、快樂主義批判を通して、優れた人とは多く取る力のある者ではなく、むしろ節制と正義を備えた、魂の秩序のある者だということを明らかにする。そして、放埒ではなく、秩序と思慮節制のある魂が優れた魂であり、思慮と節制と勇氣と正義の徳を持つ人が、すべての徳を持つ優れた者であり、幸福であると結論して、それが真実だと主張する(506E-507D)。しかも、もう一度、この説が真実だとすればと念を押しして

(508B)、その上、これまでの説は、みなこの説からの結論だったのであり(508B)、「不正が悪で醜である」という自分の説は、鉄と銅のロゴスで縛りつけられていて、決して動かないと述べるのである(509A)。

こうして、この説(ロゴス)を一つの結論として、あるいは、これまでの主張の出発点だったとして、このあと、不正を受けないための工夫と、不正を行なわないための助けの考察に入る(509B)。不正を受けないための工夫とは、時の権力者に似ることであろうが、それではかえって不正を重ねることにならざるを得ないからその方は捨てて、もう一方の、不正を行なわないための助けが何かを探究してゆく。

ところで、政治の目的とは唯一、市民の魂を善いもの、優れたものにするにすぎないことだとされていて、具体的に、市民が正義と法に従う者となること(504D)が政治の目的となるのであろうから、その助けとなるものとは、おそらく市民を善い人にするにすぎず教育のことであろう。というのも、もし不正をする者がいなくなれば、不正を受ける心配もなくなるだろうから(520D)、市民の魂が優れたものとなるよう、市民たちから不正を取り除く仕事こそが、政治の目指すべき仕事であり、ある意味でそれは、教育と哲学の仕事でもあるからだ。そしてそのために

は、市民たちに迎合する弁論術のやり方ではなく、市民の魂を善くすることを目指す哲学のやり方が必要だとされるのである。

これら一連の議論の最後になってカリクレスは、率直に答えてくれと何度も促されて、結局、召使のように迎合する必要がある、そうでないと死刑にされるかもしれないぞ」と答えて、最後まで死への恐れを語る。そして「自身を助けることもできないでいて、立派にやっていることになるのか？」とソクラテスに問う。それに対してソクラテスは、真に優れた人間の恐れるべきこととは、死ではなく、不正をすることだと言って、「決して不正をすることなしに生きたという、ただこの一つのことさえ、その人が自分の身につけているならば、立派にやっていることになるのだ。人々に対しても、神々に対しても、不正なこと何一つ言わなかったし、また行ないもしなかったということで、自分自身を助けるということが最上のこと」であり、それはこれまでに何度も同意されてきたことだ、と答えている (52D-E)。

こうして最後に、死は怖くないが不正は恐ろしいという内容のミュートスを語るのである。その際にカリクレスは、「他の話も片をつけたのだから、その話も片をつけてもらおう」と促して (52E)、それまでは時にふてく

され、無関心を装っていたカリクレスだが、少なくとも最後まで、ソクラテスの話に耳を傾けているのである。

おわりに

このソクラテスのいう、「不正をしないということ自分で分を助ける」ということは、何か微力にも思われ、それが最善の助けで、最大の力だとは思われなくても知れない。しかし、不正をしないということは自分でできることである。そしてそれを支えるものが、「不正は悪であり醜である」という「知」であるとソクラテス(プラトン)は見ているのである。この知を間違えずに持ち続けることが、われわれを踏みとどまらせ、われわれを救う最後の砦となるのである。不正をすることはいくらでも「できる」であろうし、力を使用することもいくらでもできるだろうが、それをしないことは難しい。だが、できるからといって、してはいけない場合もあるから、そこで踏み止まる「力」(能力)こそが、真の人間の「徳」なのではなからうか。³⁾

最後にミュートスが語られた後でも、「不正は悪であり醜である」というこの説(ロゴス)だけが反駁に揺るがずに止まっているのであって、このロゴスを人生の道案内に

しようではないかと言われている。そして、生きるのも死ぬのも、正義やその他の徳を修めながらにすることというこの生活態度こそ、最上のものであることを示してくれているのだから、さあ、このロゴスに従っていくことにしよう、そして他の人にも勧めよう、他の説には何の値打ちもないのだから」というソクラテスの結びの言葉（ロゴス）は、時空を超えて、われわれにまで呼びかけているのである。

この『ゴルギアス』という対話篇の内容が、「不正は悪であり醜である」と知ることという、知の「力」を重要視したものだとなると、今回のタイトルも、「善の諸相」ではなく、悪の諸相とすべきだったかもしれない。いずれにせよ、『国家』では「正義こそ善である」という証明が試みられ、『ゴルギアス』では「不正が悪で醜である」という論証が試みられ、両者はいわば表と裏の関係にあると言つてよからう。

この『ゴルギアス』篇でソクラテスが探求したことは、不正が悪だとは表面的にはわれわれも十分に知っているはずであるにもかかわらず、なぜ不正はなくならないのか、何が間違いで、何が足りないのか、われわれ自身の無知を明らかにしようとする試みだったように思われる。不正を行なうことは、当の本人にとって害になると知ったなら、不正はしないはずである。重要な点は、不正行為は、それ

が加えられる他人にとってではなく、その行為者本人にとって、その「魂」にとって、害になる悪だという点である。「魂」という概念は、ソクラテスによってその内容が革新されたと言われるが、それは「真の自己」という意味のものであって、正しさによって益され、不正によって損なわれるものともされている (cf. *Crit.* 47D-E)。そして、大切なことは、「魂ができるだけ優れたよいものであるように気をつかわねばならない。それよりも先に、あるいは同程度にでも、身体や金銭のことを気にしてはならない」(Ap. 30B)とも言われていた。しかし、われわれの日常生活は、その「一番大切なことを一番粗末にし、つまらないことを不相応に大切にしている」(Ap. 50A)のが現実であつて、それは、真の自己と自己に付随するだけのものとを厳格に区別することを忘れているからなのである。

カリクレスは、論理の上ではもはや、ソクラテスの言うことに納得しているであろうことは明らかだが、「死への恐れ」という点で、最後まで抵抗が残るのである。しかし、ソクラテスの哲学が問うものは、結局、人間にとつて、死への恐怖を超えてさえ、時として貫くべきものがあるはずだという、人間の生き方、死に方の問題であることが、ここにおいて浮き彫りにされているのである。

《注》

テキストは、Burnet 版 (Oxford Classical Texts) を使用。翻訳は、プラトン『ゴルギアス』加来彰俊訳 (岩波文庫、一九六七)、並びに、『プラトン全集』所収のものを用い、『プラトン著作集「ゴルギアス」』田中美知太郎、加来彰俊共著 (岩波書店、一九六〇) の注釈を参考とした。

- (1) ただし、快は欲望充足の結果、報酬なのであって、逆に、初めから快をめざすと、往々にして過ちを犯す。快と苦は行為選択の十分な指導原理とはならないのである (499E-500A, cf. 468B-C)。快に対する善の優位)。
- (2) ソクラテスがここで、善悪の境界はという自らの問いに自分で答えて「正しくならば善いし、不正になら悪い」と言っている点にも注目されたら (470B-C)。
- (3) 真に力があるということは、他人を支配する力があるという点ではなく、むしろ自己支配の力 (能力、デュナミス) としての徳の力のことではなからうか。(1) では「力」と支配にまつわる思い違いもまた、問われている。国家においても、魂においても、善の知が支配すべきなのである。

参考文献

- E. R. Dodds, *Plato, Gorgias*, Oxford, 1959.
- C. Kahn, "Drama and Dialectic in Plato's *Gorgias*", in *Oxford Studies in Ancient Philosophy*, vol. 1, 1983.
- Devin Stauffer, *The Unity of Plato's Gorgias: Rhetoric, Justice, and the Philosophic Life*, Cambridge U. P., 2009.

ice, and the Philosophic Life, Cambridge U. P., 2009.

Seth Benardete, *The Rhetoric of Morality and Philosophy: Plato's Gorgias and Phaedrus*, Univ. of Chicago, rep. 2009.

Jessica Moss, "Shame, Pleasure and the Divided Soul", *Oxford Studies in Ancient Philosophy*, XXIX, 2005.

加来彰俊「『ゴルギアス』篇におけるプラトンの意図」『西洋古典学研究』Ⅷ、一九六〇。

出村和彦「『ゴルギアス』篇における価値の構造についての一考察」『倫理学年報』三六、一九八七。

田中享英「ポロスは反駁されなかつたか——Gregory Vlastos, "Was Polus Refuted?" (1967) 批判——」『北海道大学文学部研究科紀要』一〇三、二〇〇一。

中澤務「ソクラテスとフィロソフィア」『ミネルヴァ書房、二〇〇七。

Aspects of Good in Plato's *Gorgias*

Yurie SHIRANE

The purpose of this paper is to show that in Plato's *Gorgias*, Socrates tries to prove his own thesis "doing injustice is evil and shame", by refuting different moral values of three characters, Gorgias, Polus and Callicles. As for what is good and bad, Callicles' criterion is based on pleasure and pain, while Polus' is based on beauty and ugliness. And Gorgias, while knowing that knowledge is the best thing, doesn't realize "doing injustice is evil and shame". Possibly this set of three characters will be then later developed into the tripartite theory of soul in *Resp.* In refuting their moral values, Socrates practices "the art of the conversion of the soul". Socrates maintains his thesis before he starts the dialogue. It is not a result of the elenchus, but a starting point of Socrates' ethical thinking. He fears committing injustice, but never fears death. Here we can see the core of Socrates's philosophy.